

ヤコブの手紙 4章1-2節における 「戦争」(πόλεμοι) と「戦闘」(μάχαι) ——暴力的意味は不可能か?——

三上 章

キーワード：ヤコブの手紙 戦争 戦闘

問 題

1. 辞書的意味と用法
2. 新約聖書における πόλεμος と μάχη 語群
3. テクストの修正は必要か
4. 社会政治的・社会経済的関心とテキストの文脈分析
5. 歴史的考察
6. われわれの解釈

結 語

問 題

ヤコブの手紙4:1に、「諸戦争(πόλεμοι)と「諸戦闘」(μάχαι)の原因に関する著者の問いかけがある。これに続く4:2の著者の答えにおいても、「あなたがたは戦闘しており戦争しており」(μάχεσθε και πολεμεείτε) という同族語が用いられている。πόλεμος-πολεμέω/μάχη-μάχομαιの語群は、字義通りには武力闘争としての戦争・戦闘を意味するが、研究者たちの多くは、教会内における戦争・戦闘は考えられないとの理由で¹⁾、もしくは他の何らかの理由で、字義通りの意味にはとらず、比喩的な意味に理解している。たとえば、一般的意味における「闘争と喧嘩の同義語」(M. Dibelius)²⁾、「キリスト教共同体における慢性的な激しい対立」(J. H. Ropes)³⁾、「乱暴な論争」(S. Laws)⁴⁾、「比喩的な意味での戦いや争い」、すなわち、キリスト教集会の中における「深刻な葛藤」と「内部分裂」(J. Schneider)⁵⁾、「手紙の読者であるキリスト教共同体の中における闘争と論争」(F. Mussner)⁶⁾、「手紙の受け取り手たちの中における分裂と不穏を強く表現したもの」(D. H. Edgar)⁷⁾、「教師たちの党派心によるキリスト教共同体内の闘争」(P. H. Davids)⁸⁾ などである。これに対して、こ

これらの語群を暴力に訴える争いに言及するものとする研究者もいるが、この立場をとる研究者は少数である (Bo Reicke; R. Martin; M. Townsend)⁹⁾。

これらの語群を、教会内の激しい論争への言及と考えるにせよ、暴力に訴える争いへの言及と考えるにせよ、これらの解釈の前提として、現実には読者が何らかの争いに加わっていたであろうという想定がある。しかし、もし著者が読者による特定の争いを念頭においていなかったとしたらどうだろうか？ ジョンソン (L. T. Johnson) は、これらの語群は特定の行動に言及するものではなく、修辭的表現に属すると考える。すなわち、ヤコブ 3:13-4:10 は、「妬み」(φθόνος) の主題に関するヘレニズム的道德訓話 (τόπος) を基に構成された単元であり、戦争・戦闘への言及もその主題の一部分をなすものである。したがって、戦争・戦闘への言及は、読者の中で行われていた実際の出来事を指すのではなく、議論における修辭だということである¹⁰⁾。そもそもジョンソンは、1:1の「ディアスポラにいる十二部族」(ταῖς δώδεκα φυλαῖς ταῖς ἐν τῇ διασπορᾷ) を特定の地域における特定の信徒たちを指すとは考えない。この句は、「トーラーの文書を規範とし、神と主イエス・キリストへの奉仕に生きる靈的イスラエル」を表す象徴的表現であるというのが、彼の解釈である¹¹⁾。この解釈の前提として、手紙の著者は主の兄弟ヤコブであるという想定がある¹²⁾。もしジョンソンの考えが正しければ、戦争・戦闘語群は、激しい論争の比喩なのか、それとも暴力に訴える争いを意味するのかという問題設定は的外れということになるだろう。

しかしながら、ジョンソンの「靈的」見方に対して、ヤコブの手紙における、貧富の差 (1:9-12)、差別 (2:1-13)、商売観 (4:13-17)、搾取と抑圧 (5:1-6)、病気 (5:13-18) といった、社会のさまざまな現実への言及が立ちはだかる。これらの言及は、著者が「社会政治的」・「社会経済的」問題に少なからぬ関心を抱いていることを印象づける。したがって、戦争・戦闘語群についても、社会の現実を視野に入れてその意味を考究すべきではないかと思われる。

さて、4:1-2の戦争・戦闘用語を教会内における激しい論争の比喩と見なす見解に戻る。ここで言われている争いは、激しい論争の程度にとどまるものなのか、それとも暴力に訴える争いに及ぶ可能性はないのだろうか？ また、「あなたがたの間にある」(ἐν ὑμῖν) と指摘されている争いが、教会内に限られるのか、それとも教会外に及ぶ可能性はないのだろうか？ この手紙が1世紀末には成立していたと仮定するなら¹³⁾、1世紀は、ローマ帝国の各地で戦争、戦闘、クーデター、一揆の数々が行われた時代である。ヤコブの手紙の背景として、ローマ帝国の圧政に反対する過激派の活動があった可能性も無視できない。

そう考えるなら、4:1-2の戦争・戦闘用語群が、暴力に訴える争いの状況を反映する可能性があることをあながち排除できないように思われる。本稿は、それらの用語群が暴力行為に言及している可能性があることを論証しようとする一つの試みである。

1. 辞書の意味

LSJ¹⁴⁾によると、πόλεμοςの本来の意味は「戦争、戦闘、闘争」である。ホメロス以後のギリシャ語文献において、この語は通常、戦争を意味した。πόλεμοι τε μάχαι τεの組み合わせは、ホメロスにまでさかのぼることができる(Ilias, I.177, 5.891)。ホメロス以後、この組み合わせは次第に定着していった¹⁵⁾。πόλεμοςは全体としての戦争だけではなく個々の戦闘にも用いられたが(Ilias, 7.174)、圧倒的にほとんどの場合、字義通り「戦争」の意味で用いられた。比喩的な用法も可能であったが、それは比較的まれであった¹⁶⁾。

BDAG¹⁷⁾は、πόλεμοςの比喩的意味の例としてクレメンスの手紙一3:2と46:5¹⁸⁾を取り上げる。これらの箇所では、それは武力を用いない「敵意・敵対、闘争、紛争、喧嘩」という意味であり、コリント教会の状況を示すと説明する。しかし、3:2は欲望への耽溺から生まれるものとして「熱狂と嫉妬、闘争と内戦、迫害と騒乱、戦争(πόλεμος)と捕囚」をあげているが、ここでの「戦争と捕囚」を比喩的意味にとることは難しい。字義通りにとるべきだろう。46:5の Ἰνατί ἔρεις καὶ θυμοὶ καὶ διχοστασίαι καὶ σχίσματα πόλεμος τε ἐν ὑμῖν; は、クレメンスがコリント教会に投げかけた問いかけである。「いったいなぜあなたがたの間に論争と憤怒と分派と分裂と戦争(πόλεμος)があるのですか?」 たしかに、πόλεμοςはここでは比喩的意味に用いられていると言える。しかし、その語の本来の意味が消失しているのではないと考えられる。クレメンスはあえて戦争という語を用いることによって、手紙の読者たちに戦争の悲惨さを思い起こさせ、教会内の分裂は戦争の悲惨さに匹敵するのだということを強調しているのである。戦争の悲惨さをよく知っていた読者たちにとって、これは痛切な問いかけだったことであろう。

μάχηの本来の意味は軍事紛争としての「戦闘、闘争」である¹⁹⁾。それは「論争、不和」、「競争 [=ἀγών]」および「苦闘」といったより広い意味で用いられることもできたが、比喩的な意味は比較的まれであった²⁰⁾。μάχηの主要な意味は、本来の意味における武力による「戦闘、格闘」である。

2. 新約聖書における πόλεμος と μάχη 語群

新約聖書には πόλεμος は 18 回出てくる。ヨハネの黙示録に 9 回²¹⁾、共観福音書に 6 回²²⁾であるが、これらすべての事例は軍事闘争としての「戦争」を意味する。他に、コリント一 14:8、ヘブライ人への手紙 11:34、そしてヤコブの手紙 4:1 にも出てくる。ヤコブの手紙 4:1 は措くとして、前二者はいずれも実際の戦争に言及する。動詞 πολεμέω は 7 回

出てくる。ヤコブ4：2以外は、すべてヨハネの黙示録に出てきて、戦争に言及する²³⁾。

μάχη は4回出てくる²⁴⁾。ヤコブ4：1を除いて、他の3回は πόλεμος との結びつきなしに単独で用いられる。テモテニ2：23とテトス3：9の μάχας は宗教論争に言及するが、コリント二7：5の μάχαι は物理的脅威に言及する可能性がある²⁵⁾。動詞 μάχομαι は4回出てくる²⁶⁾。そのうち2回(ヨハネ6：52、テモテニ2：24)は論争に言及するが、1回は傷害に至りかねない闘いに言及する(使徒7：26)。μάχομαι と πολεμέω の組み合わせは、ヤコブ4：2だけにしか出てこない。BDAGは πόλεμος の比喩的意味の事例として Dio Chrysostomus, 11[12], 78をあげている。しかし、これらの箇所では πόλεμος は単独で用いられており、πόλεμοι と μάχαι の組み合わせにおいてではない²⁷⁾。Dio Chrysostomus では複数形における両語の組み合わせが出てくるのは1回だけであり、そこでは内戦がもたらすものは「戦争と戦闘」であるとして、実際の戦争が意味されている²⁸⁾。

まとめると、文献上のデータによると、πόλεμος-πολεμέω/μάχη-μάχομαι 語群の主要な意味は戦争・戦闘であり、ヤコブ4：1-2の戦争・戦闘用語群を暴力に訴える争いへの言及として解釈する可能性を支持すると言えよう。

3. テクストの修正は必要か

以上において見た、πόλεμος-πολεμέω/μάχη-μάχομαι 語群の主要な用法は、戦争・戦闘についてであるという文献上のデータは、暴力的意味を避けようとする註解者たちに不都合を提供することになる。USBの改訂第4版によると、ヤコブ4：1-2の校訂テキストは以下のとおりである。

1 Πόθεν πόλεμοι καὶ πόθεν μάχαι ἐν ὑμῖν; οὐκ ἐντεῦθεν, ἐκ τῶν ἡδονῶν ὑμῶν τῶν στρατευομένων ἐν τοῖς μέλεσιν ὑμῶν;

2 ἐπιθυμεῖτε καὶ οὐκ ἔχετε, φονεύετε καὶ ζηλοῦτε καὶ οὐ δύνασθε ἐπιτυχεῖν, μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε, οὐκ ἔχετε διὰ τὸ μὴ αἰτεῖσθαι ὑμᾶς·

この読み方に従い、NIVは次のように翻訳している。

1 What causes fights and quarrels among you? Don't they come from your desires that battle within you?

2 You want something but don't get it. You kill and covet, but you cannot have what you want. You quarrel and fight. You do not have, because you do not ask God.

WEB の翻訳も同様である。

1 Where do wars and fightings among you come from? Don't they come from your pleasures that war in your members?

2 You lust, and don't have. You kill, covet, and can't obtain. You fight and make war. You don't have, because you don't ask.

岩波訳も同様である。

1 あなたがたの間にある戦いと言い争いはどこから来るのか。ここから、つまり肢体の中で戦いを挑んでくるあなたがたの欲情から来るのではないのか。

2 あなたがたは欲しがるが、持っていない。人殺しをし、妬むが、獲得できない。言い争い、戦うが、あなたがたは願わないから、持っていないのである。

USB の読み方は正文批評の観点から信頼できるものであり、われわれはこの読み方に従う。これに対して、その場合、2節をどう読むかに困難を覚える註解者もいる。ロープスは、通常読み方は動詞の組み合わせがもつ並行性をそこなうとの理由で、WH.mg に従い、並行性を保持する唯一の読み方として以下の読み方を提案する²⁹⁾。

ἐπιθυμεῖτε, καὶ οὐκ ἔχετε· φονεύετε. καὶ ζηλοῦτε, καὶ οὐ δύνασθε ἐπιτυχεῖν· μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε.

ロープスは φονεύετε の後にピリオドを打ち、この動詞と ζηλοῦτε との結びつきがもたらす困難を取り除こうとする。

このロープスの読み方と同一線上にあるのが NASB の翻訳である。

1 What is the source of quarrels and conflicts among you? Is not the source your pleasures that wage war in your members?

2 You lust and do not have; so you commit murder. You are envious and cannot obtain; so you fight and quarrel. You do not have because you do not ask.

新共同訳も同様である。

- 1 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。
- 2 あなたがたは、欲しても得られず、人を殺します。また、熱望しても手に入れることができず、争ったり戦ったりします。得られないのは、願い求めないからで、

ロープスの試みには無理があるように思われる。ディベリウスは、たとえそのような読み方をしたところで、φονεύετε のために文脈と適合する意味を見出すことはできないと考える。というのも、彼の見るところでは、「あなたがたは殺します」は教会の状況に合わないからである。教会では論争は可能であるが、殺人は不可能であるはずだというのである。それゆえ、ディベリウスはエラスムスに従い、φονεύετε を φθονεῖτε（「あなたがたは嫉妬しています」）に修正することを提案する³⁰）。さらに彼は、μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε を字義通り身体への暴力行為に言及すると解釈することに反対する。すぐ後に続く οὐκ ἔχετε διὰ τὸ μὴ αἰτεῖσθαι ὑμᾶς（「あなたがたが持っていないのは求めているからです」）という、祈りを勧める句との密接なつながりを分断するというのである。まさに暴力に訴えようとする人物に対して、祈りの怠慢を非難するというようなううちょうなことを著者はしないであろうというのである。そういうわけで、ディベリウスは、二つの句は本来のテキストでは分離しておらず、両者の間に καὶ という接続詞があったはずだという推測を提言する。したがって、彼の推定上の読み方は以下ようになる。

ἐπιθυμεῖτε ——

καὶ οὐκ ἔχετε

φθονεῖτε καὶ ζηλοῦτε ——

καὶ οὐ δύνασθε ἐπιτυχεῖν

μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε ——

καὶ οὐκ ἔχετε διὰ τὸ μὴ αἰτεῖσθαι ὑμᾶς

αἰτεῖτε ——

καὶ οὐ λαμβάνετε, διότι κακῶς αἰτεῖσθε,

下線部分はディベリウスによる修正を示す。しかし、率直に言って、彼の修正はかなり恣意的であると言わざるをえない。やはりわれわれとしては USB の読み方に従い、戦争・戦闘用語群と正面から向き合わなければならない。

4. 社会政治的・社会経済的関心とテキストの文脈分析

ヤコブの手紙の中に、政治、経済、社会に強い関心を示すと思われるいくつかの箇所がある。貧者と富者の両者に対して、それぞれは何を誇りとすべきかに関する忠告がある(1:10-11)。キリスト教集会に集う信者たちに対する、富者を厚遇し貧者を差別するようなことがあってはならないとの警告がある(2:1-7)。2節の「豪勢な服を着、金の指輪をはめた男性」(ἀνὴρ χρυσοδακτύλιος ἐν ἐσθῆτι λαμπρᾷ)とは、ローマ帝国の元老院か騎士階級に属する人物を示唆する。金の指輪をはめるのはそういった階級に限られていた。「豪勢な服」は、この男性が政治家志向であり自分の支持者を求めていた可能性を示唆する³¹⁾。ここで批判されているのは、キリスト教集会の成員の中に、有力政治家をパトロンとしてもつことに熱心な者たちがいたということに対してである可能性がある³²⁾。

富を獲得するため諸方へ旅する商業経営者たちに対する警告もある(4:13-17)。ここで非難されているのは、金銭それ自体ではなく、あたかも自分がいのちと時間の独裁者であるかのように、自分自身の計画を立て見込まれる利潤の計算を行う彼らの自己過信に対してである。商業経営者は、商業のことがらについても神への信頼を忘れてはならないというのである。

富者たちに対する、労働者を抑圧し賃金を支払わないとの非難もある(5:1-6)。この富者たちは大規模農業経営者および封建領主であろう。賃金支払いを正当に要求した労働者たちに対して、自分たちの利得保全のために強引な訴訟をたくらむ場合もあったようである。2:6の、貧者たちを裁判に引っぱっていったとして非難されている富者たちも同様の者たちであろう。

以上に挙げた箇所から、ヤコブの手紙の著者が政治、経済、社会のことがらに少なからぬ関心を抱いていたことがうかがわれる。著者の社会政治的・社会経済的関心は、社会にとって脅威である暴力による争いにも向けられるはずである。1:15に「欲望」(ἡ ἐπιθυμία)が罪に拡大し、ひいては罪が「死」(θάνατον)をもたらすと語られている。ここでの文脈は「試み」(πειρασμός)に関する勧告(1:2-18)であることから見て、読者は何らかの抑圧に苦しんでいたであろう状況が推測できる。1:9-11における貧富差への言及から見て、それは搾取と貧困だったと思われる。2:6にも富者による貧者の搾取への言及がある。そのような状況は信仰を練り上げる試練となる可能性もあったが(1:2-4, 12)、死をもたらす誘惑となる可能性もあった。もし読者が受けていた抑圧が耐えがたいものであり、しかも物理的なものであったとしたら、これに対して物理的に抵抗しようとする者もいたのではないかと考えられる。そこに争いが起こり、もし争いが激しければ、人の命が奪われるこ

ともありうる。その場合、「欲望」とは物理的報復への欲望ということになるであろう。「欲望」と「死」は、4：1-2における「欲情」(ἡδονῶν)・「欲しがる」(ἐπιθυμείτε)と「人殺しをする」(φονεύετε)と共鳴する。

1：19、20に「怒り」(ὀργή)の抑制への勧告があるが、試みに関する勧告と同一線上の文脈の中で語られている。読者の中には、抑圧者への怒りをこらえきれず、怒りを爆発させ、物理的報復に及ぶ者もいたのではないだろうか？あるいは、説教者たちの中に、激しい怒りをもって抑圧者たちを弾劾する説教を行い、聴衆を物理的報復に扇動する者もいたかもしれない³³⁾。こういった扇動者たち(反ローマ帝国の過激派あるいは熱心な終末待望論者)は、その激しい弾劾説教によって神の正義の実現を早めることができると考えていたようである。その場合、神の正義とは貧困の解消ということになるだろう。2：11では「律法」(νόμος)からの引用として「殺してはならない」と語られる。これも、2：6における、富者による貧者の抑圧の状況に照らして読むことができるであろう。2：1-13は、貧者が多数をしめる共同体の中に、ときには富者が入ってくる場合があった状況を示す。2：3の「会堂」(συναγωγή)が、ユダヤ教の会堂を指すのかキリスト教の集会を指すのかは明らかではないが、手紙がキリスト教徒たちに宛てられたものと見なす観点からは、おそらくキリスト教の集会を指すものと思われる。教会指導者たちの中には「富者たち」(οἱ πλούσιοι)におもねる者がおり、そのような態度が共同体の中に蔓延する傾向があったことを示す。その信仰共同体に対して、著者は、富者が貧者たちを抑圧している社会の現実を思い起こさせる。それが2：6である。「富者たち」(οἱ πλούσιοι)の中には、借金を返済することができない貧者を裁判所に訴える者がいた。そのような貧者の中には、借金返済ができないため、投獄され、そのまま獄中で死ぬ者もいたであろう。間接的に富者たちに殺されたことになる。あるいは、「富者たち」とは、元老院議員たちと結託して、ローマ皇帝に対立した者たちを指すかもしれない³⁴⁾。たとえば、ドミティアヌス帝の時代、彼らはしばしば皇帝に対立し、その結果、皇帝によって殺害された。キリスト教徒たちにとって、富者たちを歓迎し彼らの側に立つことは、巻き添えを食って殺される可能性があった。著者の見るところでは、富者におもねるということは、富者たちによる貧者の間接殺人に加担することになる。2：11で著者が読者に「殺してはならない」(Μὴ φονεύσης)という勧告の言葉を提示するのは、そのような意味においてである可能性がある。

3：1-18における「教師たち」(διδάσκαλοι)に関する勧告は、以上のような扇動型説教者を念頭に置いてのことだと考えられる。3：8において彼らの舌は、「節操のない悪」(ἀκατάστατον κακόν)であり、「死に至らしめる毒」(ιοῦ θανατηφόρου)に満ちていると語られる。ἀκατάστατονはἀκαταστασία、すなわち騒乱(暴動)³⁵⁾を示唆する。すでに1：8においても「節操のない人」(ἀνὴρ ἀκατάστατος)への言及がある。試みに直面し、状況に

流され、騒乱に巻き込まれる人を示唆するかもしれない。3：8から、説教者たちの扇動説教が信徒たちを暴力に訴える騒乱に走らせ、その結果、人の命が奪われる事態が生じたかもしれないことが推測できるかもしれない。3：16にも ἀκαταστασία への言及がある。騒乱への言及と見ることができよう³⁶⁾。この騒乱は「騒乱とあらゆる悪い行い」(ἀκαταστασία καὶ πᾶν φαῦλον πρᾶγμα) というふうには、あらゆる悪い行いの筆頭として語られている。悪い行いの筆頭といえば、暴力に訴える争いであり、中でも、戦争・戦闘がそれであろう。ἀκαταστασία は、ルカ 21：9 では、「戦争」との組み合わせで「戦争と暴動」(πολέμους καὶ ἀκαταστασίας) として用いられている。また、コリント二 12：20 では、「騒乱の数々」(ἀποκαταστασίαι) は「紛争」(ἔρις) と並んで用いられている。著者によって警告を与えられる教師たちは、共同体において「知恵と知識を持つ者」(σοφὸς καὶ ἐπιστήμων) を標榜する者たちであるが、彼らの教説や説教がもたらすものは、共同体とそれが置かれている社会の中への騒乱、すなわち暴力に訴える争いなのである。したがって、彼らが標榜する知恵であれ知識であれ熱情であれ、本物であるかどうか吟味されなければならない。著者の分析によると、それらは偽物であり、実は、彼らの心の中にある「妬みと利己的野心³⁷⁾」(ζῆλος καὶ ἐριθεία、3：16) の隠れ蓑にすぎない。すでに3：14においても「苦々しい妬みや利己的野心」(ζῆλον πικρὸν καὶ ἐριθείαν) が指摘されている。ἐριθεία は、新約聖書においては、社会共同体の破壊をもたらす反社会的な態度について用いられている語である³⁸⁾。「分争心」あるいは「党派心」といったところであろう。

したがって、3：17において「上からの知恵」(ἡ ἄνωθεν σοφία) は「平和的」(εἰρηνική) であると著者が語る時、それは現に行われている暴力に訴える争いを念頭においてのことであろう。また、3：18において「しかし、正義という実は、平和を造っている人々によって、平和によって蒔かれている³⁹⁾」(καρπὸς δὲ δικαιοσύνης ἐν εἰρήνῃ σπείρεται τοῖς ποιούσιν εἰρήνην.) と著者が語る時、それも現に行われている暴力に訴える争いを念頭においてのことであろう。社会における正義の実現という崇高な目的は、暴力的手段によってではなく、「平和によって」、すなわち平和な手段によって追求されなければならない。言いかえると、社会の正義は「平和を造っている人々によって」実現されていく。「平和を造っている」(ποιοῦσιν) と現在時称が使われているのも、著者が平和実現を現在の急務と意識していることを示すものと理解することができる。

以上において吟味した文脈は、4：1-2における戦争・戦闘への言及に繋がっていると考えることができよう⁴⁰⁾。暴力に訴える争いの数々が現実に行われており、読者もそれらに巻き込まれていたであろう状況が考えられるが、どうしたら争いをなくすことができるか? それは平和を求める著者及びその仲間たちにとって切実な問題であったはずである。暴力に訴える争いを止めさせるためには、その最中にいる人たちに、その暴力的行動がいかな

る原因に由来するかを認識させる必要があると、著者は考えたであろう。それが4：1-2における戦争・戦闘の原因についての問いかけと答となって現れたと見ることができよう。すでに言及された ἀκαταστασία (3：16) / ἀκατάστατος (1：8；3：8) に4：1-2の πόλεμοι καὶ μάχαι/ μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε が対応する。死をもたらすとされた ἡ ἐπιθυμία (1：15) に4：1-2の τῶν ἡδονῶν/ ἐπιθυμεῖτε が、また、騒乱の原因として指摘された ζῆλος καὶ ἐριθεία (3：14、16) に4：1-2の ζηλοῦτε/ στρατευομένων が対応する。さらに、死／人殺しへの言及 (1：15；2：11；3：8) には4：2の φονεύετε (「あなたがたは殺害している」) が対応する。したがって、φονεύετε の意味を考えるにあたり、直接であれ間接であれ実際の殺害の可能性を避けて通るわけにはいかない。

さて、4：1-2において暴力に訴える争いが著者の念頭にあるとして、なぜ著者はあえて戦争・戦闘用語群を用いるのかという問題を考えなければならない。字義通りに戦争・戦闘活動 (たとえばゼロテ運動など) を考えているからなのか？あるいは、より小規模の暴力に訴える争いを考えているからなのか？手紙の読者がキリスト教徒であり、4：1の「あなたがたの間にある」(ἐν ὑμῖν) がキリスト教共同体を指すという解釈に立つなら⁴¹⁾、研究者の多数が考えるように、教会内に戦争・戦闘行為が行われることは無理であるから、教会内における激しい論争を示す比喩的表現であろうという解釈になる。たしかに教会内で実際の戦争・戦闘が行われるということは考えられない。しかし、より小規模の暴力に訴える争いであっても、それは考えられないことなのだろうか？

5. 歴史的解釈

手紙の読者はキリスト教共同体であったと仮定して、どの時代のどのような状況を想定することができるだろうか？手紙の冒頭で著者は読者に「ディアスポラの12部族」(ταῖς δώδεκα φυλαῖς ταῖς ἐν τῇ διασπορᾷ) と呼びかける。この人たちはだれなのか、また、著者がだれなのかを同定することはむずかしい。いかようにしても推測の域を逃れることはできない。それゆえ、ディベリウスは次のように言う。

「われわれは比喩的解釈をとらざるをえない。そして可能な解釈は一つだけである。すなわち、この呼び名を真のイスラエルへの言及とみなすことである。彼らの故郷は天にあり、地上は異郷、つまりディアスポラにすぎない。したがって、それは地上の全キリスト教徒への言及なのである」⁴²⁾。

しかしながら、もっと詳しい説明を試みる註解者たちもいる。マーティン (R. P. Martin) は、ヤコブ4：1-10の背景として60年代初期、すなわち第一次ユダヤ戦争(70年)直前の時期に属するパレスティナにおける宗教・政治環境を想定する。彼は、著者を「主の兄

弟ヤコブ」であると見なし、著者とそのキリスト教共同体は「ゼロテ党に感染した社会」の中に置かれていたと想定する⁴³⁾。その想定に基づき、マーティンは次のような推測を行う。共同体の成員の中にはかつてゼロテ党員だった者たちもいたはずである。彼らなら、政治・経済の問題について共同体内の他のメンバーと衝突した場合、命のやりとりをする争いに及んだ可能性がある。さらにそれがもっと大規模な流血に拡大する危険に、ヤコブの共同体は直面していた可能性がある。60年代初期のパレスティナにおいては、極端な国粋主義と内戦が吹き荒れていた。ローマからの解放と自由を求めるゼロテ運動の高まりの中、ヤコブの教会員の中にも運動に飛び込み、剣を持ってローマ軍と戦う者もいたであろう。文字どおり戦争・戦闘に参加し、命のやりとりをした者がいたのではないか。そのようにマーティンは推測する⁴⁴⁾。

デイビッツ (P. H. Davids) も同様の見解に立ち、より詳しい説明を試みる。彼は手紙の社会状況として、第一次ユダヤ戦争以前の10年の時期におけるパレスティナを想定する⁴⁵⁾。ヘロデ・アグリッパ一世の死後、あいつぐ飢饉も相まってパレスティナの社会情勢は悪化していった。この時期、パウロの醜金の事例が示すように、教会も貧困に苦しんでいた。60年代には、神殿祭司階級の間にも不和が生じ、富裕な大祭司階級はローマ帝国と結託して下級祭司階級から十分の一税を奪った。これに対して、下級祭司階級は貧困の道をたどりゼロテ党と結託した。こうして両者の間に激しい衝突が起こり、互いに罵倒しながら投石しあった。そのようにヨセフスは記している⁴⁶⁾。このような状況に直面し、教会はどのように反応したのだろうか? おそらく富者たちに対して憤りを覚えたのではないかと思われる。教会員の多くから土地を奪ったのは、富裕な大土地所有者たちである。教会員をキリスト教徒であるとの理由で、雇用において差別したのも、富裕な雇用者たちである。キリスト教徒たちの抑圧に関して、ローマ帝国に手を貸したのも富裕な大祭司階級である。このように教会が貧困と抑圧に苦しんでいたことは推測できる。他方、教会に金持ちが入会したとしたら、あるいは入会したあるキリスト教徒が金持ちであったとしたらどうだろうか? 教会は金持ちをぞんざいには扱わなかった可能性がある。貧困に苦しむ教会はお金を必要としていた。金持ちの中には気前よくお金を教会に寄付する者もいたであろう。もっとも、厳しい経済状況の中で金持ちたちは、概してお金を握って離さない方向に傾いていたであろう。こうして、教会の外で行われていたゼロテ党と親ローマ派の闘争は、教会の中にも取り込まれるようになったであろう。不満、憤り、党派闘争、ゼロテ党への入党の誘惑が教会の中に渦巻いていたであろう。主の兄弟ヤコブの人物像は、このような状況と適合する。使徒言行録によると、義人ヤコブは論争の調停者として描かれている(15:13-21; 21:18-26)。ヤコブの手紙はこれに合致する。この手紙の著者は、富者たちに対して、イエスの強烈な言葉(ルカ6:24-26)に匹敵するほどの、厳しい終末論的弾劾を行う(ヤコブ5:1-3)。読

者の多くは、貧困層に属し、中にはゼロテ運動に参加しようとする信徒もいたであろう。しかし、過激な行動や言葉（4：1-3；3：5b-12；1：19-20）に対しては、手紙の著者は抑制すべきことを説き、報復は神に委ねるように勧告している⁴⁷⁾。

以上が、手紙の背景として、60年代のパレスティナにおける主の兄弟ヤコブとその教会を想定することに基づく解釈である。この解釈は可能ではある。しかし、困難が伴うことも認めなければならない。というのも、もし仮に著者が主の兄弟ヤコブだとするならば、もっとイエスへの言及が数多くあってしかるべきである。ところが、実際には、この手紙におけるイエスへの言及はまれである⁴⁸⁾。また、この手紙にはパウロ主義に対する批判（2：14-26）が見られるという観点からは、手紙はパウロ以降のものであると見なさなければならず、主の兄弟ヤコブの手になることはありえないことになる。そうすると、おそらくこの手紙は早くても紀元1世紀末の作ということになるであろう。さらに、長老たちが特定の役割をもっていること（5：14-15）を考えると、遅い場合には、紀元2世紀初期の作という可能性すらある。

迫害への言及の繰り返し（1：2、12；2：6-7；5：10）の観点からは、ドミティアヌス帝の時代、とりわけその統治の終わり頃（81-96年）を想定するほうが蓋然性が高いであろう⁴⁹⁾。95年に、キリスト教徒たちが政治的陰謀に関わったかもしれないことを示唆する事件が起こった⁵⁰⁾。フラヴィウス・クレメンス⁵¹⁾と皇帝自身の姪であるその妻ドミティラが「無神論」のかどで告発された。ディオ（Dio Cassius）によると、「二人は無神論のかどで告発された。この罪状で、ユダヤ人たちの慣習に逸脱していた他の多くの者たちも有罪宣告を受けた。ある者たちは死刑となり、他の者たちは財産を没収された」（ἐπιηνέχθη δὲ ἀμφοῖν ἔγκλημα ἀθεότητος, ὅφ' ἦς καὶ ἄλλοι ἐς τὰ τῶν Ἰουδαίων ἤθη ἐξοκέλλοντες πολλοὶ κατεδικάσθησαν, καὶ οἱ μὲν ἀπέθανον, οἱ δὲ τῶν γούν οὐσιῶν ἐστερήθησαν）。クレメンスは処刑され、ドミティラはパンダテリア島に流刑となった。ここで問題となるのは、罪状である。「ユダヤ人たちの慣習」（τὰ τῶν Ἰουδαίων ἤθη）はユダヤ教を示唆するが、しかしながら、ユダヤ教はローマの公認宗教であるから、ユダヤ教への帰依のゆえに処刑されることはなかったはずであると考えられる。むしろ「ユダヤ人たちの慣習」という用語は、ユダヤ教ではなくキリスト教を指している可能性がある⁵²⁾。エウセビオスは、ドミティラがキリスト教信仰のゆえに島に追放されたこと、さらに、ドミティアヌス帝が「ダビデの一族に連なる者」（イエス・キリストの親族）を殺すように命じた、と述べている⁵³⁾。「無神論」（ἀθεότης）とは国家宗教に従わないことを意味し、大逆罪（maiestas）に相当した。ドミティアヌスの治世にキリスト教徒たちがその罪状で告発される可能性は大いにあった。この事件は、キリスト教が上流階級にも及んでいたことを示唆する。クレメンスとドミティラが皇帝に対する犯罪に関わったことを示す証拠はない。しかしながら、この事件の数ヶ月後にドミティアヌス

は陰謀によって殺害されることになる⁵⁴⁾。この点は注目に値する。ドミティアヌスに最初に手を下したのは、ステパヌスという解放奴隷だった。彼はドミティラの執事であり、キリスト教徒であったようである⁵⁵⁾。陰謀者たちの中にはドミティアヌスの妻ドミティアも含まれていた。彼らはドミティアヌスを暗殺した後、ネルヴァを後継者にすることに前もって合意していた。皇帝と敵対関係にあった元老院議員たちは、ドミティアヌスの死の報告に歓喜し、さっそく議会を招集し、ネルヴァを皇帝として受け入れた。

このエピソードから、ドミティアヌスの治世に、政治的陰謀と流血に加わったキリスト教徒たちがいた可能性が大きいことを推察できると言えよう。

6. われわれの解釈

手紙の執筆年代をドミティアヌスの治世に設定するなら、キリスト教徒たちが暴力に訴える争いに加わった可能性を簡単には払拭することができないように思われる。ヤコブの手紙4：1-2は、字義通りに読むならば、教会の理想像に反することになるであろうが、この不都合に正面から向き合わなければならない⁵⁶⁾。テキストは1-3節が一つのまとまりである。

1 Πόθεν πόλεμοι καὶ πόθεν μάχαι ἐν ὑμῖν; οὐκ ἐντεῦθεν; ἐκ τῶν ἡδονῶν ὑμῶν τῶν στρατευομένων ἐν τοῖς μέλεσιν ὑμῶν;

2 ἐπιθυμεῖτε καὶ οὐκ ἔχετε, φονεύετε καὶ ζηλοῦτε καὶ οὐ δύνασθε ἐπιτυχεῖν, μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε, οὐκ ἔχετε διὰ τὸ μὴ αἰτεῖσθαι ὑμᾶς,

3 αἰτεῖτε καὶ οὐ λαμβάνετε διότι κακῶς αἰτεῖσθε, ἵνα ἐν ταῖς ἡδοναῖς ὑμῶν δαπανήσητε.

「あなたがたの間にある諸戦争はどこからですか？ また、諸戦闘はどこからですか？」(Πόθεν πόλεμοι καὶ πόθεν μάχαι ἐν ὑμῖν;) これは、実際に暴力に訴える争いに加わっていたキリスト教徒たちにこそよく当てはまる問いかけであろう。「ここから、つまり、あなたがたの諸肢体の中で兵士のように戦っている、あなながたの諸快楽からではありませんか？」(ἐκ τῶν ἡδονῶν ὑμῶν τῶν στρατευομένων ἐν τοῖς μέλεσιν ὑμῶν;) 著者は、暴力の原因を人間の中にある「諸快楽」(ἡδοναί)であり、その基本的性質は戦争をし続けることにあると指摘する⁵⁷⁾。好戦的な読者に関して言えば、その快楽として宗教的激情が考えられるであろう。しかし、暴力の原因は快楽だと言われても、読者はすぐに理解できるとはかぎらない。そこで、著者は快楽が暴力を生むメカニズムを説明する。

第一段階として、「あなたがたは欲しがっていますが、もっていません」(ἐπιθυμεῖτε καὶ

οὐκ ἔχετε)。快樂は「欲しがる」こと (ἐπιθυμεῖτε)、すなわち「欲望」(ἐπιθυμία) へと読者を駆りたてているが、欲望は自己実現を阻まれている (οὐκ ἔχετε)。

そこで、第二段階として、「あなたがたは殺害しており、熱狂者であり、獲得できていません」(φονεύετε καὶ ζηλοῦτε καὶ οὐ δύνασθε ἐπιτυχεῖν)。「あなたがたは殺害しています」(φονεύετε) は単純な殺人のことではなく、人の命を奪うことにつながる行為を指すものと思われる。たとえば、熱狂的な説教者がその説教によって聴衆を扇動し、殉教の死に至らしめるような事態が考えられる。続く καὶ ζηλοῦτε を「あなたがたは熱狂者です」⁵⁸⁾ と理解するならば、以上の解釈と符合するであろう。

教会の指導者たちが「富者たち」(οἱ πλούσιοι) と結託していた可能性があることを、2：6が示唆することは、先に見たとおりである。この富者たちが元老院議員である可能性がある(2：2)ことも、先に見たとおりである。この教会の指導者たちは、4：1-2で非難されている人たちと同一であるかもしれないと考えられる。5：1-6において富裕な地主たちへの警告が語られるが、彼らは熱狂的傾向をもつ教会指導者たちと通じていた可能性がある。そうするとここでの警告は、熱狂的傾向をもつ指導者たちとそれに影響された信徒たちへの警告でもあるということになるだろう。著者は、富裕な地主たちに対して、「あなたがたは義人を断罪し、殺害した」(καταδικάσατε, ἐφονεύετε τὸν δίκαιον) と弾劾する。「義人」は特定の人物を指すのではなく、「富者による貧者の抑圧を表す一般的な描写」⁵⁹⁾ であるとして理解できよう。断罪と殺害への言及は、社会的に低い地位に置かれ不利益を被っていた人たち⁶⁰⁾ が、富者たちによって圧迫されていた現実を反映している可能性がある。富者たちが貧者たちの暮らしを奪い、賃金を搾取することは殺害に等しいと言えよう⁶¹⁾。あるいは借金返済ができない貧者を投獄し、そのままそこで命を終える結果に至らしめたとしたら、それも殺害に等しいと言えよう。

熱狂的傾向の可能性に関する話に戻る。もし大事な命が奪われる事態が生じていたならば、教会の指導者たちは、理性を働かせて、それを防止すべきところであるが、実際はそうではなかった。熱狂は飽くところを知らなかったようである。「あなたがたは獲得できていません」(οὐ δύνασθε ἐπιτυχεῖν) とは、そういうことだろうと思われる。

第三段階として、「あなたがたは戦闘しており、戦争しています」(μάχεσθε καὶ πολεμεῖτε)。理性による歯止めがきかなくなった熱狂が、小規模の暴力からもっと大きな規模の暴力に拡大していた状況が推測されるのではないかと考えられる。4：4で著者は読者に「姦通している女どもよ」(μοιχαλίδες) と呼びかける。神への敵対を非難する言葉である⁶²⁾。4：7で著者は「悪魔に逆らいなさい」(ἀντίστητε τῷ διαβόλῳ) と勧告する。これも極めて厳しい言葉である。共同体に関連する出来事として、激しい論争にとどまらず、暴力に訴える争いが実際に起こっていたのではないかと考えられるのである⁶³⁾。

結 語

ヤコブの手紙4：1-2の戦争・戦闘用語群が暴力に訴える争いに言及する可能性はないのだろうか、これが本稿の問題であった。この問題についてわれわれは、辞書の意味と用法、新約聖書における用法、正文批判、社会政治的・社会経済的関心に関する文脈の分析、歴史的考察といった観点から、探求と論証を試みた。結論として、これらの用語群は、暴力に訴える争いに言及しており、ヤコブの手紙の読者がその争いに加わっていた可能性を示唆すると言えるのではないかと思われる。

注

- 1) 比喩的理解の試みの背後には、初期キリスト教会は暴力を避け平和を尊んだはずであろうというキリスト教への尊敬の念が動機としてあるように思われる。このような気持ちはわからないわけではない。しかし、初期キリスト教徒たちは実際に暴力に訴える争いに関わらなかったのかという歴史問題は、宗教的理想から切り離して考察されるべきであろう。人類は歴史を通じて暴力行為を繰り返してきた。キリスト教徒も例外ではない。彼らはしばしば好戦的でさえあった。歴史の現実と正直に向き合うなら、はたして初期キリスト教徒だけが暴力行為と無関係だったと言えるだろうか？
- 2) M. Debelius, *James. A Commentary on the Epistle of James* (Fortress Press, Philadelphia, 1976): 216.
- 3) J. H. Ropes, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of James*. The International Critical Commentary (T&T Clark, Edinburgh, 1961): 253.
- 4) S. Laws, *A Commentary on the Epistle of James*. Harper's New Testament Commentaries (Harper & Row, San Francisco, 1980): 167.
- 5) ヨハネス・シュナイダー『ヤコブの手紙。共同書簡』NTD新約聖書註解10 (NTD新約聖書註解刊行会、1975年)：70。
- 6) F. Mussner, *Der Jakobusbrief*. Herders Theologischer Kommentar zum Neuen Testament (Herder, Freiburg, Basel, Wien, 1987): 177.
- 7) D. H. Edgar, *Has God Not Chosen the Poor? The Social Setting of the Epistle of James*. Journal for the Study of the New Testament Supplement Series 206 (Sheffield Academic Press, 2001): 190.
- 8) P. H. Davids, *The Epistle of James A Commentary on the Greek Text*. The New

- International Greek Testament Commentary(Eardmans, 1982):156. 同様に、辻学『ヤコブの手紙』現代新約注解全書（新教出版社、2002年）：185も、「教師も絡んだ教会内の分派抗争」と理解している。
- 9) Bo Reicke, *The Epistles of James, Peter and Jude*. The Anchor Bible 37 (Doubleday, Gardencity, New York, 1982): 45. R. P. Martin, *James*. Word Biblical Commentary 48 (Word Books, Texas): 144-145. M. J. Townsend, 'James 4.1-4: A Warning against Zealotry?', *Expository Times* 87 (1976): 211-213.
 - 10) L. T. Johnson, *The Letter of James. A New Translation with Introduction and Commentary*. The Anchor Bible 37A (Doubleday, 1995): 276.
 - 11) L. T. Johnson, *The Letter of James*: 171-172.
 - 12) L. T. Johnson, *The Letter of James*: 167, 92-108.
 - 13) 大貫隆、山内真監修『新版 総説 新約聖書』（日本キリスト教出版局、2003年）：370。辻学『ヤコブの手紙』：45-46。
 - 14) H. G. Liddell/ R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, revised and augmented by H. S. Jones, with a Supplement (Oxford, 1968): 1432. [LSJ].
 - 15) E.g. Epictetus, 3.13.9 'Ορᾶτε γάρ, ὅτι εἰρήνην μεγάλην ὁ Καῖσαρ ἡμῖν δοκεῖ παρέχειν, ὅτι οὐκ εἰσὶν οὐκέτι πόλεμοι οὐδὲ μάχαι οὐδὲ ληστήρια μεγάλα οὐδὲ πειρατικά, ἀλλ' ἔξεστιν πάση ὥρα ὀδεύειν, πλεῖν ἀπ' ἀνατολῶν ἐπὶ δυσμάς. 下線は筆者による。Cf. J. H. Ropes, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of James*: 253.
 - 16) TDNT (πόλεμος, πολεμέω): 503.
 - 17) *A Greek-English Lexicon of the New Testament and other Early Christian Literature* (Third Edition), revised and edited by F. W. Danker, based on W. Bauer (The University Chicago Press, 2000): 844. [BDAG].
 - 18) 3.2 Ἐκ τούτου ζῆλος καὶ φθόνος, ἔρις καὶ στάσις, διωγμὸς καὶ ἀκαταστασία, πόλεμος καὶ αἰχμαλωσία. 46.5 Ἰνατί ἔρεις καὶ θυμοὶ καὶ διχοστασίαι καὶ σχίσματα πόλεμός τε ἐν ὑμῖν;
 - 19) LSJ: 1085.
 - 20) TDNT (μάχομαι, μάχη): 527.
 - 21) 9:7, 9; 11:7; 12:7, 17; 13:7; 16:14; 19:19; 20:8。
 - 22) マタイ 24:6; マルコ 13:7; ルカ 14:31; 21:9。
 - 23) ヨハネの黙示録 2:16; 12:7; 13:4; 17:14; 19:11。
 - 24) コリント二 7:5; テモテ二 2:23; テトス 3:9; ヤコブ 4:1。
 - 25) TDNT (μάχομαι, μάχη): 528.

- 26) ヨハネ 6:52; 使徒 7:26; テモテニ 2:24; およびヤコブ 4:2。
- 27) 12.77 に単数形における πολέμου καὶ μάχης の組み合わせが出てくるが、すぐ前に言及される「戦争の前兆」(πολέμου ζύμβολον) に照らして、この組み合わせは実際の戦争への言及と見なすべきであろう。
- 28) 38:11 οἱ καὶ τὴν ἐναντίαν αὐτῇ φιλοῦντες, τὴν στάσιν, ἧς μέρη καὶ ὑπουργήματα πόλεμοι καὶ μάχαι, καὶ ταῦτα ἐν τοῖς δῆμοις ἀναστρέφεται καὶ τοῖς ἔθνεσιν, ὥσπερ ἐν τοῖς σώμασιν αἱ νόσοι. 下線は筆者による。
- 29) J. H. Ropes, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of James*: 254.
- 30) M. Debelius, *James*: 217-8.
- 31) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude* (Doubleday, 1964): 27.
- 32) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 6.
- 33) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 20-21.
- 34) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 28.
- 35) コリント二 6:5; 12:20; ルカ 21:9。
- 36) L. T. Johnson, *The Letter of James*: 273 は、「反社会的行動」、「社会動乱」の意味にとる。
- 37) L. T. Johnson, *The Letter of James*: 267 の訳、“selfish ambition” に従う。
- 38) ローマ 2:8; ガラテヤ 5:20; フィリピ 1:17; 2:3。L. T. Johnson, *The Letter of James*: 271.
- 39) 基本的に、L. T. Johnson, *The Letter of James*: 267 の訳、“But the fruit that is righteousness is sown in peace by the makers of peace” に従う。
- 40) L. T. Johnson, *The Letter of James*: 275. F. Mussner, *Der Jakobusbrief*: 176. 辻学『ヤコブの手紙』184。
- 41) 「あなたがたの間に」(新共同訳)。「あなたがたの間にある」(岩波訳)。「君たちの中の」(辻)。“among you”(L. T. Johnson; Bo Reicke; その他多数).“bei euch”(F. Mussner)。筆者もこの読み方に賛成する。
- 42) M. Dibelius, *James*: 66. R. E. Brown, *An Introduction to the New Testament* (Doubleday, 1966): 741-2 も思弁の抑制を提言する：“the Epistle was written after James’ lifetime by one who respected that figure’s authority. Speculations as to the exact identity of the writer then become useless.” “FROM WHERE? TO WHOM AND WHERE? There is scant evidence for settling these questions.” R. P. Martin, *James*: xxxii-xxxiii; 14 の推測によると、ヤコブの手紙の背景は「ゼロテ党に感染した社会」であり、元ゼロテ党員も教会の成員に含まれていたとされる。

- 43) R. P. Martin, *James*: 144.
- 44) R. P. Martin, *James*: 156.
- 45) P. H. Davids, *The Epistle of James*: 28-34.
- 46) ヨセフス『ユダヤ古代誌』20: 180-181。P. H. Davids, *The Epistle of James*: 33.
- 47) P. H. Davids, *The Epistle of James*: 34. Cf. also M. J. Townsend, 'James 4.1-4: A Warning against Zealotry?', *Expository Times* 87 (1976): 211-213. タウンSENDも、マーティンやデイビッツと同様に、手紙の執筆年代を55-60年頃に設定し、ヤコブの教会にはゼロテ党に加入し、ゲリラ戦やテロ活動を行ったユダヤ人キリスト教徒がいたであろうと推測する。
- 48) 1 : 1 ; 2 : 1。
- 49) Cf. Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 6. ライケは、ヤコブの手紙の執筆年代を90年頃に設定する。
- 50) Bo Reicke, 27-27. S. ベンコ編著、新田一郎訳『原始キリスト教の背景としてのローマ帝国』（教文館、1989年）：85-87。M. Sordi, *The Christians and the Roman Empire* (Croom Helm, London & Sydney, 1983): 44-50. *Dio's Roman History VIII Books LXI-LXX*. Loeb Classical Library (Harvard University Press, 1982): 67. 14. 2.
- 51) ウェスパシアヌス帝の兄で内乱時代に殺されたサピヌスの孫にあたる。
- 52) S. ベンコ編著、新田一郎訳『原始キリスト教の背景としてのローマ帝国』：86。
- 53) エウセビオス著、秦剛平訳『教会史』1（山本書店、1986年）：3. 18, 19。
- 54) *Dio's Roman History VIII Books LXI-LXX*: 67. 14. 5, 67. 18. 2. スエトニウス『ローマ皇帝伝』下（岩波文庫、1986年）の「ドミティアヌス」3, 17。
- 55) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: XXVIII.
- 56) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 45 は、次のように述べる。“Historical honesty demands that we acknowledge the situation as it was, rather than re-create it as we or others should like it to have been”.
- 57) ここでは「快楽」(ἡδονή) は「欲望」(ἐπιθυμία) とほぼ同義で用いられていると思われる。Cf. Dibelius, 215. n. 40. 悪い意味における ἡδονή が戦争の原因だと思える考え方は、ギリシャ・ヘレニズムの思想家の間ではきわめて一般的だった。Cf. Dibelius, 215.n.41. Cicero (106-43 BC), *De finibus*, 1.44; Pseudo-Lucianus (after II AD), *Cynicus* 15; Philo (I BC-I AD), *Decalogoi*, 151-153. ἡδονή もしくは ἐπιθυμία と戦争・戦闘との間に因果関係を見る考え方は、プラトンにさかのぼることができる。Cf. Plato, *Phaedo*, 66C-D. プラトンの考えによると、「肉体の諸欲望」(αἱ τοῦτου

ἐπιθυμία) は、人間の魂の中にある理性的部分によって抑制されないなら、もろもろの戦争や内戦や戦闘を引き起こすことになる。この考え方はその後、プラトンの流れを汲む思想家たちによって受け継がれて行った。ヤコブの手紙の著者がプラトンやプラトン主義哲学を知っていたかどうかについては知るすべがない。しかし、そういったいくぶん哲学的な考えが、πόλεμοι καὶ μάχαι と快樂への欲望との間に因果関係を見出す著者にも備わっていたと想定することは決して無理ではないであろう。

- 58) Cf. Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 45 は φονεύετε καὶ ζηλοῦτε を “You kill and are fanatics” と訳している。ライケはクレメンスの手紙一4:7-6:3を参照する。そこでは、ζῆλος καὶ φθόνος は罪のない敬虔な人々を死に追いやった事例の数々が語られている。
- 59) D. H. Edgar, *Has God Not Chosen the Poor?*: 202-203. Cf. also R. P. Martin, *James*: 181-182; P. H. Davids, *The Epistle of James*: 179-180.
- 60) D. H. Edgar, *Has God Not Chosen the Poor?*: 106-107 は、ヤコブの手紙で言及される「貧者たち」(οἱ πτωχοί) は、単に経済的に貧しい人たちのことではなく、さまざまな不遇のゆえに社会的身分を失った結果、社会の周辺部で不安定と窮乏の生存を余儀なくされている人たちを意味するとして、次のように述べる。“πτωχός is not principally an economic term, but rather denotes one who, due to unfortunate circumstances, has experienced a devaluation of his inherited status within the structures of kinship and politics, consequently having to exist precariously, in destitution or near-destitution, on the margin of society”.
- 61) L. T. Johnson, *The Letter of James*: 304-305.
- 62) Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 46.
- 63) Cf. R. P. Martin, *James*: 182. “James may be suggesting that politically engineered resistance to Rome, as with the Zealot cause and its militancy, is the influence of the devil”. 5:12の誓いに関する警告、「誓うことを止めなさい」(μὴ ὀμνύετε) も同様の関連で理解できるかもしれない。Martin, *James*: 214 は、ゼロテ党員の間「愛国的熱情の厳粛な約束」として誓いが行われたことを指摘する。これと同様のことが、ヤコブの共同体の熱狂的な成員たちによって行われていた可能性もある。Bo Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*: 52-54 も、ここでの警告を「改革または革命への熱狂」に対するものと見ている。

Πόλεμοι and Μάχαι in James 4:1-2: Is a Violent Meaning Impossible?

MIKAMI Akira

Abstract

There is a reference to ‘wars’ and ‘battles’ in James 4:1-2. These apparently military terms tend to be understood by the majority of scholars in metaphorical ways, like as ‘synonyms for strife and quarreling’ in general (M. Dibelius), ‘the chronic and the acute hostilities in the community (J. H. Ropes), ‘quarrels and struggles’ among the readers (Bo Reicke), ‘violent dispute’ (S. Laws), ‘a strong symbolization of the divisions and instability of the addressees’ (D. H. Edgar).

These terms would certainly allude to quarrels occurring in the community. But what kind of quarrels? Just ones within the limit of vehement disputes by words without recourse to any violent act? It seems that the possibility of using violence cannot be easily eliminated.

This article purports to show that the war and battle terms in James 4:1-2 could refer to the actual use of violence in quarrels in the following outline.

1. The setting of the problem
2. The lexicographical meaning and usage
3. The πόλεμος / μάχη word-group in the New Testament
4. The socio-political and socio-economic concern and the contextual analysis of the text
5. The historical consideration
6. Our interpretation
7. Conclusion